

装苑

S
O
-
E
N

8

AUGUST
2017

I have a thing for
Paper & Stationery

紙

クリエーターが煮かれる、
身近すぎると特別な存在

と文房具!

MIDOR! の
ペーパーコレクションと
ファッション

私の好きな紙のこと

祖父江 慎、高田 唯、
永瀬沙世、寺田尚樹

アーティストが語る 紙と文房具

横山裕一、栗林 隆、Nerhol、
たなかみさき、オカタオカ ほか

クリエイターによる ペーパードレス

森永邦彦、中山路子、
大野陽平、矢島沙夜子、DONA

紙のクリエイションを 訪ねて

女優 宮崎あおいが作る紙こもの
たなかみさきのツバメノート訪問記
羽車の封筒、ビュリーの紙石鹸 ほか

KIGI 渡邊良重の 紙の記憶

恐竜と紙 最果タビ

ニューヨーク・メトロポリタン美術館で
クリエイターが感じた

コム デ ギャルソン展

PLAY A SENSATION

吉田ユニ×長瀬智也

装苑男子
吉沢 亮

装苑 presents
アクセサリー-蚤の市

このブランドの製図が見たい!
アキコアオキ

2017年8月号 装苑 編集長 渡辺 雅也 発行 装苑編集部 印刷 株式会社印刷 2017年8月23日発行 定価 1,200円(税別) 発行部数 10,000部



©GALLERY DE ROOM 702

アン・ヴァレリー・デュボン展

古着のいろいろな柄をパッチワークし、動物などをモチーフとするテキスタイル彫刻でデビューしたアン・ヴァレリー・デュボン。大阪のアンティークショップに併設のギャラリーで開催中の企画展では、2部屋の展示空間を効果的に使い分ける。会場に入って最初の空間は、白壁の白い空間。フランスの教会などに設置されている、怪獣をモチーフにしたガーゴイルという彫像（雨樋の機能と宗教的な意味合いを併せ持つ）にインスパイアされた白布のテキスタイル彫刻などを展示する。そして2室目は、かつて鉄工所だったこの建物の機械室に当たる空間。天井から植物を吊るし、動物の立体が展示されたインスタレーションは、宗教的な雰囲気漂う白い部屋から一変し、さながら森といったところ。等身大のパペットたちの映像も上映され、複数の表現方法が重層的に2部屋に展開する。

7月29日（土）まで。「GALLERY DE ROOM 702」大阪市浪速区稲荷2-7-18
TEL06-6561-3702 12時～19時 日曜・祝日休 観覧無料
<http://www.dr702.com/gallery.html>



右 石山修武 建築家S家 (1984年) © 石山修武
左 藤本壮介 House NA (2011年) © Iwan Baan

日本の家 1945年以降の建築と暮らし

取り上げられるのは56組の建築家による75の日本の住宅建築。400点を越す建築模型や手書きの図面、写真、映像などによって、時代性や立地環境と建物の関係、施主と建築家とのコミュニケーションなどの多様な視点から建築を検証する。太平洋戦争が終わり、焦土と化して住宅が不足した都市部では、土地を購入して持ち家を建てるのが政策として推進された。1950年代に建てられたアントニン・レーモンドや丹下健三の自邸には、住宅建築の方向性が提示され、伊東豊雄の初期代表作《中野本町の家》(1976)は、施主である伊東の姉家族の要望に応えるために試行錯誤を重ねた作品だ。藤森照信《ニラハウス》(1997)、西沢立衛《森山邸》(2005)、藤本壮介《House NA》(2011)など、エピソードと時代性に事欠かない名作の数々がラインナップされる。

7月19日（水）～10月29日（日）。「東京国立近代美術館」東京都千代田区北の丸公園3-1
TEL03-5777-8600（ハローダイヤル）10時～17時（金・土曜～21時）
観覧料：一般¥1,200、大学生¥800 <http://www.momat.go.jp>



（ミュージアム・オブ・チャンス）より2013年アーカイバル・ビクメント・プリント 作家蔵

ダヤニータ・シン『インドの大きな家の美術館』

インド・ニューデリー出身のダヤニータ・シンは、性産業や児童労働などの社会問題をテーマにフォトジャーナリストとしてキャリアを開始した。初期の代表作《マイセルフ・モナ・アハメド》は、「第3の性」と呼ばれるユナック（去勢された男性）の取材から生まれた作品だ。被写体であるモナ・アハメドを13年にわたって撮り続け、その信頼関係からリアリティを映し出す。やがて、欧米が思い描くインドのイメージからの離脱を決意する。僧院に暮らす少女たちを写した《私としての私》は、彼女がフォトジャーナリズムから離れる転機に位置する作品だ。近年は、スーツケースや木枠の構造体をベースに移動式のアートスペースを構築し、自らキュレーションも行う。写真を用いていかにも物語を伝えるか――。初期作品から最近作まで、被写体や手法が変わりながらもその意識は徹底している。

7月17日（月・祝）まで。「東京写真美術館」東京都目黒区三田1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内
TEL03-3280-0099 10時～18時（木・金曜～20時）月曜休（7/17は開館）
観覧料：一般¥800、学生¥700 <https://topmuseum.jp>



Interval of Time #2, 2016年 縦180cm x 横258cm Mixed-media

増田将大『Interval of Time』

対象を撮影し、その画像を撮影した場所にプロジェクターで投影して再び撮影。その行為を繰り返す。幾多もの図像を用いることでズレと重なりを含んだ画面を生み出す。そして、シルクスクリーンに転写し、複数の版を重ねてプリントされた画面には、撮影のプロセスとは異なる重層性が現れてくる。鑑賞者が自身の記憶を辿り直させるようなイメージでも言おうか。何百本の映画を編集し、ナレーションでまとめあげて『映画史』を完成させたジャン＝リュック・ゴダールの試みを想起させる。今年の春に東京藝術大学大学院で修士課程を終え、博士課程に在籍する気鋭の作家。2012年TURNER AWARD 大賞や'14年CAF賞にて最優秀賞を受賞するなど、精力的に出品を重ね、評価を高めている。技法の探求とテーマの連動によって、将来的な表現の広がりにも期待が高まる。

7月14日（金）まで。「un petit GARAGE」東京都中央区銀座7-17-1 銀座武蔵野ビル1階
TEL03-5539-6600 12時～18時30分 土・日曜・祝日休（7/1、7/8は開廊）観覧無料
<http://yyarts.co.jp>